

台地の北端部の行橋平野低地部で、残丘状に点在し、矢留の丘陵、かつての八景山、視山から元永に至る残丘群、杵尾山、養島山、二先山などへ連続する。

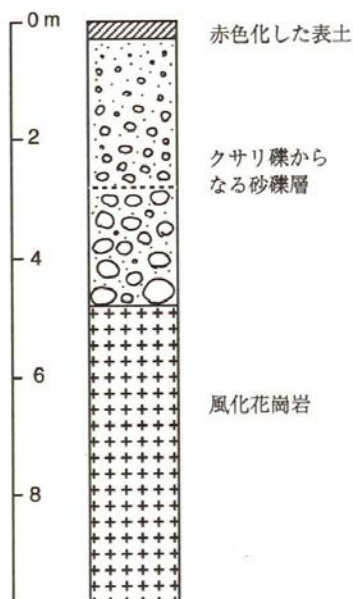
豊津町の丘陵のうち、築城町との境界に位置する一六三・一<sup>メートル</sup>峰から北へ一三五・二<sup>メートル</sup>峰付近までは丘頂緩斜面と平坦面を示している。

## 二 台 地

豊津町の台地は、河川により二つの地域に大きく区分される。今川と祓川の間の台地は豊津原、祓川と城井川の間は新田原と、それぞれ名づけられている(福岡県、一九七〇)。また、祓川沿いには河成段丘が分布している。これらの台地は高度的に高位、中位、低位の各段丘面からなっていることから、それらを順次説明する。

### (1) 高位段丘(H<sub>2</sub>)面

豊津町における高位段丘面は、行橋平野全体のH<sub>2</sub>面が最高位である。今川と祓川に挟まれた豊津原に分布する段丘面で、扇状地礫層が堆積し、祓川の扇状地として形成されたものである。分布高度は、最高所の台ヶ下で八六・二<sup>メートル</sup>、最低は八景山付近の四〇<sup>メートル</sup>である。本段丘面は、北および北西方向へ〇・八八度の勾配で傾くが、上流側に当たる南部には風隙の地形が幾つかみられる。特に上荒谷では、上流側に浅く開いた谷があり、海拔七〇<sup>メートル</sup>の地点に分水界がある。これはH<sub>2</sub>面形成後、開析される過程で、当時のこの地点で



第8図 内垣におけるH2面の堆積物

の開析谷の谷底高度が七〇メートルであったことを意味している。これは祓川が西から東へ河道を移していく過程で、河川争奪の現象が起き、それによりかつての開析谷の上流が別の河川の上流へと変化していく様子を知ることができる。また、祓川の上流域にはこの扇状地に相当する河成段丘面が点在する。節丸から犀川町下木井にかけての祓川の両岸の九〇〜一〇〇メートルの高度には、それがよく残っている。H2面形成時の祓川の河道の高度は、下木井付近で海拔二〇〇メートル、節丸付近で海拔九〇メートル、台ヶ下付近で八六メートル前後にあったと考えられる。それ以後現在までに祓川は三〇〜四〇メートルの高度を浸食したことになる。今川流域にはH2面はみられない。

H2面を形成する堆積物は、豊津町台ヶ下では分級のよくない最大径二メートル、平均径一〇〜一五センチメートルの円礫と亜円礫からなる砂礫層が、二〇メートル以上の厚さでみられる。礫種は安山岩、凝灰岩、花崗岩などで風化が著しく、かなりクサリ礫化している。また、赤色化も著しく、上部の砂質部では2.5YR4/8を示し、礫は7.5R4/8を示すものもある。砂礫層の厚さは一〇〜二〇メートルである。上流側の河成段丘としてのH2面は豊津町節丸西方の祓川左岸から上流の下木井にかけての九〇〜一〇〇メートルの高度でみられる。堆積物は赤色化・クサリ礫化した砂礫層であり、

豊津付近の扇状地と同様である(第8図)。

(2) 中位段丘面

i 中位段丘(M<sub>1</sub>)面

M<sub>1</sub>面は祓川右岸の豊津町綾野付近から北東方向に稲童まで広がる開析扇状地面で、高度六〇メートルから一二メートルまで〇・四一度で傾き下がる。高位扇状地面のM<sub>2</sub>面に比べると、かなり緩やかである。この段丘面は浅い谷により開析されており、随所に、河川争奪の結果としての風隙の地形が残っている。しかし、農地の構造改善事業で、水田の区画整理が行われたため、傾斜に直行する方向での浅い谷と段丘面の繰り返し地形が不明瞭になった。

堆積物は、粗粒で、分級のよくない円礫からなり、安山岩礫が多い。赤色化・クサリ礫化も著しい。行橋市稲童では下部の五メートル以上が礫層で、最大径三〇センチメートル、平均径一〇センチメートルの分級の悪い円礫層で、直径一五センチメートルの大きさの礫まで風化してクサリ礫化している。また礫層の上部一メートルは2.5YR4/8に赤色化している。その上位に一メートルの厚さで上部に腐植物を持つ砂層がのり、更に上位に一・五メートルの厚さの火山灰層がのる。この火山灰層には北部のように明瞭な球殻体集積部が認められないが、阿蘇4火砕流に関係するものと考えられる。

ii 中位段丘(M<sub>2</sub>)面

本面は行橋平野全体では、より高位の段丘面を取り巻くように平野全域に分布するが、祓川沿いではM<sub>2</sub>面はM<sub>1</sub>面の浸食面としてみられるのみである。飯岳地塊列以北の行橋平野北部では、M<sub>1</sub>面にみられる火山灰層

と全く同じ火山灰層が分布する。

一方、南部ではM1面と同様に火砕流堆積物は分布せず、阿蘇4火砕流に伴う降下火山灰層が分布する。それゆえM2面までの段丘面は、七・五万年以前に形成されたと考えることができる。

### (3) 低位段丘面

低位段丘面は行橋平野で最低位の段丘面で、主に扇状地の形態をとる。しかし、豊津町では祓川に沿って、中位段丘面を浸食した段丘面としてみられるのみである。行橋市域に入ると、祓川左岸の福原を中心とする扇状地が顕著で、先端部は沖積面下に埋没し、その連続は沖積面下に追跡できる。

堆積物は福原では最大径二〇センチ、平均径五センチの扇状地礫層である。この段丘面には阿蘇4火砕流に関係する火山灰層はみられないので、七・五万年以前に降形成された面をすべて含んでいると思われる。

## 三 低 地

低地は今川流域の低地と祓川流域の低地があり、その両者は異なった性格を持っている。今川流域の低地は、いわゆる谷底平野としての性格を持っているが、祓川流域の低地は扇状地としての性格を持っている。すなわち、豊津町の北縁部での今川流域の低地は一二〜二三メートルの海拔高度で、祓川流域の高度は一八〜二〇メートルであり、南縁部付近では、今川流域で二〇〜二五メートル、祓川流域では七五〜八五メートルで、明らかに祓川のほうが急勾配で流下している。